

聖武天皇『雜集』所収「周趙王集」訳注〈Ⅰ〉

安 藤 信 廣

聖武天皇宸翰『雜集』一卷は、天平勝宝八年（七五六）六月二一日、聖武天皇の四十九日御忌に献物の一つとして東大寺に施入された。施主は光明皇太后である。献物の目録『国家珍宝帳』には、「雜集」一卷・右平城宮御宇後太上天皇御書」と明記され、聖武天皇の宸翰であることは疑いない。

『雜集』は、仏教に関連のある漢詩文を集めた作品集であり、その作品数はあわせて百四十五篇、総字数は一万八千四百二十六字を数える。全て中国の六朝・唐代に書かれた作品ばかりと考えられるが、それらがどのような経緯をたどって聖武天皇に転写されるに至ったかは、不明である。ただ巻末に「天平三年九月八日写了」とあることから、天平三年（七三二）、聖武天皇二十一歳のときに筆写されたことが、これもまた確実に分かる。

宸翰『雜集』の資料的価値について最初に発言したのは、内藤虎次郎（湖南）だった。その「聖武天皇宸翰雜集」（『支那学』2—

3号。大正十年）には、次のように記されている。（旧漢字は全て常用漢字に改め、ルビを付すなどした。）

此の巻中に収められたる詩文は、いづれも今は支那にも佚せる者のみにて、明の馮惟訥が詩紀、清・嘉慶勅編の全唐文、嚴可均の全宋文、全後周文、全隋文等を補ふに足る。

内藤湖南は右の論文のなかで、作者名の明らかな作品群を指摘し、かつ名前の明らかな六人の作者について考究・紹介している。その中の一人が「周趙王」である。「周趙王」とは、北周の太祖（文帝）宇文泰の子で趙王の爵位をあたえられた宇文招（五四五—五八〇）を指す。趙王宇文招は、北周王朝の代表的な文章家だったのだが、その作品集『趙王集』十卷は、中国では全く散逸してしまい、ただ一首の詩「從軍行」以外は今に伝わっていない。ところが宸翰『雜集』中には、「周趙王集」という総題のもとに、七篇十首（集中の「平常貴勝唱礼文」一篇は四首から成っていると

考えられる)の文章が収められている。いずれも相当に長編の散文であり、北周時代のみならず、六朝時代(南北朝時代)の北朝の文学・思想を知る上で、貴重な資料である。内藤湖南が作者「周趙王」を紹介した文章は、次の通り。

北周書卷題三十三、北史卷第五十八に並びに伝あり。名は招、字を豆廬突とうろとつといひ、文帝の子なり。幼より聰穎にして、博く群書に涉り、好んで文を属し、庾信ゆしんが体を学び、詞に輕艶多しといへり。武成の初め(五五九)趙国公に封せられ、建德三年(五七四)、爵を進めて王と為る。大象二年の頃、隋の文帝は周の帝位を奪はんとするの企てありけるが、趙王は密かに之を除かんと図りたれども成らず、反つて隋文帝に謀反を以て陥いれられて殺されたり。文集十卷あることは本伝に見えたるも、隋書経籍志には止だ八卷と著録したり。日本見在書目には後周趙王集十卷とありて、本伝と同じ。新唐書芸文志には後周趙平王集十卷を録せり。…然るに趙王の文辞としては、北周詩紀に従軍行一首を文苑英華より採録したるのみにて、文は全く佚したり。この雑集に載せたる道会寺碑文、平常貴勝唱礼文の如き、皆義旨といひ、辞章といひ、誠に堂々たる雄篇にて、其余の諸序も、駢体の妙を極めたり。北周にては趙王は滕聞王とうぶんと共に宗室中の能文家として聞えた

るが、滕王は庾子山集の序今に伝はりて、其偉大なる文采を認めしむるも、趙王の文はこの雑集に出でたる者によりて、僅かに其の風流を窺ふことを得るのみ。

本稿は、その宸翰『雑集』所収の「周趙王集」に訳注を試みたものである。ことに、中国六朝史上、決して小さくない意味を持つと思われる趙王宇文招の言語・文学・思想の特徴をさぐるために周辺の文学者―ことに庾信―や当時の仏教用語との関係を重視して注釈を施した。また、何よりも、趙王宇文招の思想の中味を把握するために、現代日本語への全訳を試みた。

本論に先立つてまず述べておかななくてはならないのは、すでに小野勝年氏に『宸翰雑集』所収「周趙王集」釈義(一)(二)〔南都仏教〕四一・四二号、昭和五三・五四年〕の労作が存在していることである。これは同集の全体に注釈を施し、訓読を付したものである。本稿は、従つて、蛇足に類する試みになるかもしれない。しかし、句読の切り方の提案、語義の訂正、出典の発見などを行い、全面的な現代語訳を加えた点に新たな意味のある作業だったと信ずる。もとよりそれも、小野氏の驥尾に付して可能となつたのであり、その学恩に深く感謝しなくてはならない。

また、宸翰『雑集』全体の研究も、日本文学・歴史学の分野で近年めざましく進んでいる。中でも、合田時江氏編「聖武天皇」雑

集』漢字総索引」(一九九三年・清文堂)の登場は、この分野の研究を飛躍させたこと疑いない。本稿も、同書に負う所が大きかった。合田氏の学恩に対しても深く感謝したい。なお本学史学科勝浦令子氏、日本文学科鉄野昌弘氏、本学古代史研究会の諸氏より多大の御教示をいただいた。

本論を開始するに先だって、凡例を記す。

一 本稿の底本は合田時江氏編「聖武天皇『雑集』漢字総索引」を用い、本文は毎句改行して表記した。

一句読の切り方については、合田時江氏前掲書と小野勝年氏「『宸翰雑集』所収『趙王集』釈義(一)(二)」を参照したが、最終的には筆者自身の判断に従った。注釈については小野勝年氏前掲書を参照しつつ、筆者の調査を基礎に付したが、小野氏の見解と大きく違うなど問題のある箇所については、注の中でそのつど触れた。

一 原文の文字は異体字や略体を含み、旧字体(正字)に改めるのは複雑な上に意味が無いので、常用漢字を用いることとした。問題があれば、注の中で触れた。

一 「周趙王集」の作品の順序が本来どのようなものだったか不明であり、『雑集』所収の順序に従うのが妥当とも考えられるが、『文選』の体例と趙王に大きな影響を与えたと考え

られる庾信の現行本(倪璠注本)の体例にならない、「(唱礼文)」「序」「銘」の順で配列することとした。

一 本文中「」で示した箇所は、原文では欠字となっており、筆者の判断で文字を補ったものである。文字を補い得ない場合は□で示し、空欄のままとした。『』は、本文に空欄は無いが明らかに脱字があると考えられる箇所、筆者の判断で文字を補っている。

一 今回は「平常貴勝唱礼文」の冒頭的一篇に訳注を施し、以後この体例に従って七篇十首の全てに訳注を行いたい。

平常貴勝唱礼文

〈一〉法身凝湛之文

1 夫法身凝湛、
夫れ法身は凝湛にして、

2 似太虚而無際。
太虚に似て際無し。

3 妙理淵深、
妙理は淵深にして、

4 同滄海而難測。
滄海に同じくして測り難し。

5 但徧和拘舍、
但だ徧和拘舍のみ、

6 普応十方、
普く十方に応じ、

7 毘盧遮那、
毘盧遮那のみ、

8 遍該万品。
遍く万品を該む。

9 大慈雲起、大慈 雲と起こるは、
 10 等玉葉之重舒、玉葉の重なり舒がるに等しく、
 11 甘露雨垂、甘露 雨と垂るるは、
 12 譬濯枝之交落、濯枝の交ごも落つるに譬う。
 13 一音所唱、一音の唱うる所は、
 14 隨聞各解、聞くに随つて各おの解し、
 15 三転所詮、三転の詮く所は、
 16 因機並悟、機に因りて並びて悟る。
 17 或復散花含咲、或いは復た 散花して咲みを含み、
 18 俱証善生、俱に善の生ずるを証し、
 19 動地放光、地を動かし光を放ちて、
 20 咸標罪滅、咸な罪の滅ぶを標す。
 21 故知福惠尊高、故に知る 福惠の尊高にして、
 22 威神降重、威神の重きを降すを。
 23 人天勝軌、人天の勝軌にして、
 24 智斷良田、智斷の良田なるを。
 25 今日施主、今日の施主、
 26 弟子△甲は、弟子 △甲は、
 27 乃是三多、乃ち是れ三多にして、
 28 久樹八恒、久しく八恒を樹つ。

29 慕須達之前蹤、須達の前蹤を慕い、
 30 【追】郁伽之後轍、郁伽の後轍を【追】う。
 31 所以於茲広廈、所以に茲の広廈に於いて、
 32 仍建道場、仍りて道場を建（建）つ。
 33 用此高因、此の高因を用て、
 34 便開法席、便ち法席を開く。
 35 宝幡飄颻、宝幡は飄颻し、
 36 雜【天】花而共色、【天】花に雜わりて色を共にす。
 37 法鼓鏗鏘、法鼓は鏗鏘として、
 38 帶梵音而俱響、梵音を帶びて響きを俱にす。
 39 菓味甘美、菓味 甘美にして、
 40 如在歡喜園中、歡喜園の中に在るが如し。
 41 飯氣紛馨、飯氣 紛馨にして、
 42 似出衆香国内、衆香国の内より出ずるに似たり。
 43 大衆証明、大衆は証明し、
 44 為礼寂滅種智、礼を寂滅・種智、
 45 雄猛靈覺、雄猛・靈覺、
 46 能仁調御、能仁・調御、
 47 慈氏法王、慈氏の法王に為す。
 48 願施主乘斯福善、願わくは施主 斯の福善に乘じ、

49 広沾九族、
広く九族を沾し、

50 該彼六親。
彼の六親を該まんことを。

51 沢遍昇『降』、
沢は遍く昇『降』し、

52 慶兼存没。
慶は存没を兼ねんことを。

53 並使解窮七覺、
並びに解をして七覺を窮めしめ、

54 識洞三明。
識をして三明を洞かしめば、

55 弊帛稍除、
弊帛 稍く除かれ、

56 金体便現。
金体 便ち現われん。

57 灰炭斯尽、
灰炭 斯に尽き、

58 樹想不生。
樹想 生ぜざらん。

59 葉惱皆謝、
葉惱 皆謝り、

60 蓋纏永息。
蓋纏 永く息まん。

61 禅惠日増、
禅惠 日に増し、

62 道如方具。
道如 方に具わらん。

《訳》

〈118〉

1 そもそも 真理そのものとしての仏陀の身体は 澄みきった
水のように透明で、あたかも虚空に似て はてしもなく広がって
いる。また仏の尊い真理そのものは あくまでも奥深く、あおい

海と同じように その深さをはかることなどできない。

5 だから ただ かりそめの手段ではあるがすぐれた説法だけ
が、仏の真理を知ろうとする世の全ての人々の求めに応じられる
のであり、真理を目に見えるすがたに体现した毘盧遮那仏だけが
この世の全ての存在をつつむことができるのである。

〈924〉

9 仏のたいなる慈悲が雲のようにわきおこるさまは、あたかも輝
く木の葉が重なりあつて茂るすがたのようである。甘露にも似た
仏のめぐみが地上をうるおすさまは、濯枝と名づけられた六月の
雨がゆたかに大地に降るさまに譬えられる。

13 その慈悲と甘露にはかならない唯一至高の音声で語られた仏
陀の説法を、聞く者はそれぞれの心の状態によって無限に理解し
てきたし、仏陀が三つに分けて語った説法を聞いて、人々はそれ
ぞれの心中のきっかけによつて みな悟りを得たのだった。

17 あるときには 仏のすぐれた説法のために天空から花が散り
落ち また仏陀がほえみたまい、聴衆の心に善のきざしたこと
が明らかにされた。また、大地が揺れ動き光が放たれて、人々の
罪の滅び消えたことが示された。

21 それゆえに 人は 知ることができるのである。仏陀のめぐみ
が尊く高く、そのはかり知れない力が重々しい神威をこの世に降

したのだということ。その仏陀の説法こそ、人間と天人のすぐれた軌道であり、悟りの智慧と迷いを断つためのすぐれた土壌なのだということ。

〈25→42〉

²⁵今日の施主である仏弟子の某甲は、三つの善き徳を修め、八つの不変の善事を行ってきた。祇園精舎を寄進した須達長者の跡を慕い、布施を好んだ郁伽長者を追慕してきた。

³¹そこで この大きな邸宅において、建物もそのままに仏道修業の場を作ったのだった。そしてその気高いゆかりによって、いま仏法のあつまりを開いたのである。

³⁵宝玉のように美しい幡^{はた}は風に揺れ、天上から降る花々とまじってかがやきを共にし、仏法の尊さを伝える太鼓は高く鳴って、浄土の音色を帯びて響きあう。

³⁹くだものの味わいは甘く美しく、天界の歡喜園の中にいるようにさえ思われ、食事の香りはいりまじってただよい、浄土の衆香国からあふれ出てきたようにさえ思われる。

〈43→52〉

⁴³この法席につどう人々は証^{あか}しを立てて信仰をちかい、寂滅・種智・雄猛・靈覺・能仁・調御・慈氏などの名の仏法の主に礼拝をおこなう。

⁴⁸願わくは 施主がこの善事のさいわいによって、広く一族を仏のめぐみにうるおわせ、その家族を仏の恩沢によってつつむことができるように。

⁵¹恩沢があまねく天地の間を昇り降りし、さいわいが生者と死者に平等にもたらされるように。

〈53→62〉

⁵³さらに 人々の知力で仏法の七つの修行をきわめ、人々の見識の力で三つの神通力をつらぬき修めるならば、破れよごれた布地のような迷妄はしだいにとり除かれ、その奥から、仏の黄金の体そのものである真理が現われてくるだろう。

⁵⁷迷いの灰も、悩みの炎も消えはて、樹木のように伸びるあの妄念も生まれなくなるだろう。木の葉のように広がる悩みも去り、心をおおいからめていた煩惱も、永遠にやむだろう。さとのめぐみは日々が増し、究極の真理が、身にそなわるであろう。

《注》

○平常貴勝唱礼文 日常に用いる貴^{たつと}く勝^{すぐ}れた仏を礼讃する文。

「唱礼」は、仏に対して礼讃を唱えること。「唱礼文」は、仏への礼讃を唱えた文。

○法身凝湛之文 本文冒頭「法身凝湛」の四文字をとって仮題

とした。「平常貴勝唱札文」は、本篇を含む四篇から成っているが、各篇には題名が付されていない。小野氏は後半二篇のみに冒頭四文字をとって仮題を付しているが、前半二篇にはそのような処置をしていない。いまは、小野氏に従って前半二篇に仮題を付す。従って、「平常貴勝唱札文」は、次の四篇から成る。

一 法身凝湛之文

二 因果冥符之文

三 無常一理之文

四 五陰虚仮之文

1 法身 仏の究極的な本体。真理そのものとしての仏の身体。

色も形も無い、真実そのものである仏の本体。サンスクリット語 dharma-kaya の訳。《弘明集》卷十一。高明二法師、答李交

州森難仏不見形事并李書《「夫法身凝寂、妙色湛然。故能隠顕順時、行蔵莫測。」(夫れ法身は凝寂にして、妙色は湛然たり。故に能く隠顕して時に順い、行蔵は測る莫し。)(敦煌願文集》

仏堂内開光明文。Stein 5573 ; 5638《「実相凝空、随縁以呈妙色。法身湛寂、応物感而播群形。」(実相は凝空にして、縁に

随って以って妙色を呈す。法身は湛寂にして、物の感ずるに応じて群形を播す。)

1 凝湛 水が深く澄みきっていること。

2 太虚 おおぞら。

3 妙理 きわめてすぐれた道理。仏の窮極の真理。《弘明集》卷十。大梁皇帝、勅答臣下神滅論、公論郎王靖答《「睿

藻淵玄、妙理深極。」(睿藻は淵玄にして、妙理は深極なり。)

4 淵深 奥深い。「淵」も「深」も、ふかい意。

5 漚和拘舎 「漚和拘舎羅」の略。「漚和拘舎羅」は、サンス

クリット語 upāya-kausalya の音訳。人々に究極の真理を明らかにするための、かりそめだが、巧みな手段。「善巧方便」などと訳す。いわゆる「方便」のことだが、ここでは、仏陀

が人々を真理にみちびくために行う説法を指す。

6 十方 あらゆる方向。東・西・南・北・南東・南西・北東・

北西の八方に、上・下を加えたもの。全世界。

7 毘盧遮那 仏の名。サンスクリット語 Vairocana の音訳。

『華嚴経』の教主としての仏の名。「輝きわたるもの」の意。

歴史上の仏陀のみならず、過去および未来のすべての仏は、皆この毘盧遮那仏の異なる現われとされる。すべての仏の本

体とされる仏。なお旧訳(晋・仏跋陀羅訳)『華嚴経』(六

十卷本)では、「盧舎那」と音訳されている。『華嚴経』の中でこの仏が「毘盧遮那」と訳されるようになるのは唐代に入

ってから(実叉難陀訳・八十卷本『華嚴経』)であり、北周時

代にすでに趙王がこの呼称を用いていることは、注目に値している。(補注参照)

8 遍該万品　ひろくあらゆるものをおおいつくす。また、あまねくあらゆる存在のなかにみちみちる。「該」は包括する意で、おおう、つつむ。また具備する意で、そなわる、充足する。「万品」は、万物、あらゆる存在。

10 玉葉　花木の葉の美称。また、雲のいろどり。△梁・簡文帝「詠雲」詩▽「玉葉散秋影、金風飄紫煙。」(玉葉　秋影を散じ、金風　紫煙を飄わす。)

11 甘露　苦悩を癒し、長命を得させる兜率天の靈液。最高の滋味で、涅槃の理想境や仏の慈悲にみちた教えなどを比喻する。△『法華經』卷三▽「為大衆、說甘露淨法。」(大衆の為に、甘露の淨法を説く。)△庾信「仰和何僕射還宅懷故」詩▽「願憑甘露入、方仮慧燈輝。」(願わくは甘露より入るに憑り、方に慧燈の輝きを仮らん。)

12 濯枝　陰曆の五月から六月にかけて降る雨。小野氏はこの箇所を「濯祓」と判読し、次のように注する。「祓濯にもつくる…みそぎすること。」しかしここは明らかに「濯枝」と判読できると考えられる。文脈上も「濯枝」の方が通じる。△『初學記』卷二引『風土記』▽「六月有大雨、名濯枝雨。」(六月大

雨有りて、濯枝雨と名づく。)

13 一音　仏のただ一つの音声。仏が説法をするときの声。小野氏は「唱礼の一音節をいう」と注するが、ここは仏の説法について述べていると考えられ、そう訳出した。△『維摩詰經』仏国品▽「仏以一音演說法、衆生隨類各得解。」(仏は一音を以て法を演べ説き、衆生は類に随つて各おの解するを得たり。)

15 三転　三つの段階にわけて教えを説くこと。教えを車輪にたとえ、それを説くことを「転法輪」と言う。真理を示す(示)と、真理の修行を勧める(勧)と、真理を証したことを明らかにする(証)の三段階に分けて教えを説くことを「三転」と言う。

17 散花　花びらを散らす。また、天から花が散りおちる。「散華」。仏の教えを聞いた人々が歡喜して花びらをまくこと。また、仏が教えを説いたり来迎するなどの時の奇瑞。△六十卷本『華嚴經』十地品▽「(諸仏子)心皆大歡喜、散衆名華香、供養於如来。」(「諸もろの仏子は」心に皆大いに歡喜し、衆名の華香を散じ、如来を供養す。)

17 含咲　ほほえむ。「咲」は「笑」と同じ。仏が人々の帰依を受けてほほえむことが、いろいろの仏典に記されている。

△『仏説弘道広顯三昧經』受封拝品△「(竜王) 供奉世尊及比丘僧、以為精舎、…時世尊笑。(竜王) 世尊及び比丘僧に供奉し、以つて精舎と為す…時に世尊笑う。」

18 善生 善い心が生じる。善根が生じること。小野氏注には「幸福・功德・往生の人生をさすのであろう。滅罪の対句」とある。しかし20句は「罪滅」(罪滅ぶ)とあり、その対句であるので「善生」も「善生ず」と読むこととする。

19 動地放光 地面が震動し光を放つ。仏が説法をしたり姿をあらわすときの奇瑞。△六十巻本「華嚴經」十地品△「地及大海水、悉皆震動。」(地及び大海の水、悉く皆震動す。)

△『弘明集』卷十一。高明二法師、答李交州森難仏不見形事并李書△「夫如来応物凡有三焉、一者見身、放光動地。」(夫れ如来の物に応ずるは凡そ三有り、一は身を見し、光を放ち地を動かす。)

22 威神降重 尊い神霊が重々しい威力をくだす。仏が重い威厳をあらわすこと。小野氏は「降重」を「隆重」に改め、次のように注する。「原文は降とあるも隆の誤りか。如来の威厳のおごそかなこと。」あるいは従うべきかと考えられるが、今は文字を改めず、「降重」のままとして解する。

23 人天勝軌 人々と神々のすぐれた道。「軌」は、みち。また、

軌範、手本。

24 智断 智慧と断惑。真理を洞察する智慧と、惑いを断ちきる精神の力。

24 良田 すぐれた田地。悟りの功德を得るための因となる智慧や行為。

25 施主 施しをする主人。自分で費用を出して僧を供養したり、寺に財物を施したり、法会を開いたりする人。

26 △甲 なにがし、「某甲」と言うのに同じ。「△甲」「某甲」「△乙」などはみな、人名を直接記すのを避けたもの。

27 三多 善き仏弟子の三つの徳目。多くの善い友を持ち、多くの説法を聞き、多くの浄観を行うこと。また、多くの仏を供養し、多くの善い友を持ち、多くの仏法を問うこと。

28 八恒 八種類の不変の徳目。「恒」は、つね、不変の意。永久に変わることのない、修行者の八つの徳目。

29 須達 人名。須達長者。サンスクリット語・パーリ語 Sudatta の音訳。スダッタ。「須達多」とも音写する。貧しい人々、孤独な人々に食を給したので「給孤独長者」と呼ばれた。中インドのシラーヴァステイー(舍衛城)の長者で、釈尊と教団のためにジェータ太子(祇陀太子)の苑林を買いとり、祇園精舎を建てて寄進した。小野氏は「須達。Sudana の

対音。一に須大掣太子に作る。葉波国の太子で、余りに布施を好んだので、王に追放され…」と注している。しかし「須達」は「須大掣」とは別人と考えるべきであろう。

30【追】郁伽之後轍 郁伽長者の残したわだちを追慕する。

原文は一字空闕になっているが、29句と対句になっているので、「慕」と対応する動詞が入る。「追慕」という語を二つに分けて対応させたものと考え、「追」を補った。「追」も、したう意。小野氏注には「慕に對してたとえば〔敬〕のごとき意味の字が脱落しているのであろう」とあり、「敬」を補っている。その可能性も十分にある。「郁伽」は、サンスクリット語 Ugra の音写、郁伽長者。郁伽長者は、仏の説法を聞き、仏道を修行した。その後は妻を布施し、仏の死後、財産を布施した。『中阿含經』中の「郁伽長者經」に見える。

31広廈 大きな建物。施主の家を言う。

32仍建道場 (もとの建物を) そのまま用いて、仏道を修行する道場を建てる。「仍」は、もとのまま用いる意。「建」を、原文では「建」としている。「建」は、「建」の異体字である。しかし、聖武天皇の筆跡は「逮」のようにも見え、合田氏はこれを「逮」と翻字している。ところが「逮」は、およぶ、とどく意で、通じ難い。また、『雑集』全体を通じてこの文字

の用例は七例を数えるが、合田氏はその全てを「逮」としている。そのため『雑集』には「建」は一度も使われず、「逮」のようにあまり使用されない文字が頻出するという結果になっている。やはりここは「逮」とし、「建」の異体字と見るべきだろう。△『雑集』隋大業主詩▽「発心功已逮、繫念罪便銷。」(発心の功 已に逮(建)ち、繫念の罪 便ち銷(消)ゆ。)

34法席 僧を招いて説法を聞き供養する集まり。

35宝幡飄颻 とうとい旗が風に揺れる。「宝幡」は、法事に際してたてられる旗。

36雑「天」花 法事の旗が天界の花とまじる。原文は、「雑花而共色」となっている。しかし対応する38句が「帶梵音而俱響」となっており、「花」の上に一字欠けていると考えられる。小野氏は「蓮」を補っていて、それは十分に首肯できるが、今は「梵音」に対するものとして「天」を補い「天花」とした。

37法鼓鏗鏘 法要に打たれる鼓が高くひびく。「鏗鏘」は、金屬・玉石の樂器などがひびくさま。△庾信「秦州天水郡麦積崖仏龕銘」▽「雷乘法鼓、樹積天香」(雷は法鼓に乘じ、樹は天香を積む。)

38 梵音 梵唄ぼんばい（仏教の経文に節をつけて読むこと）の音声。

また、仏や菩薩の音声。△『法苑珠林』卷四九▽「具此五者、乃名梵音。」（此の五者を具そなうるは、乃ち梵音と名づく。）

40 歡喜園 忉利天たうりてん（サンスクリット語 Trayastrimsa の音訳）

にある園地の名。忉利天は、インドラすなわち帝釈たいしゃく天が住んでいる天界。「歡喜園」は、その中の喜見城郊外にあり、天人がここに入れば歡喜の情が生じるとされる。

42 衆香国 香積如来の浄土の名。この園中の建物や庭など全てが良い香りをはなつとされる。『維摩經』香積仏品にみえる。

43 大衆 サンスクリット語 Parisad の意識。会衆えじゆ。説法の集まりである会座えざに集まった人々。法会の参会者。

44—46 寂滅・種智・雄猛・靈覺・能仁・調御 仏の徳質の名。

転じて仏の徳を示す名号。小野氏注に次のように言う。「寂滅は涅槃、種智は一切種智の略で、一切種智は諸法の總相と別相のすべてを知る智慧。靈覺は、正覺と同じ。能仁は儒教道徳における仁の具現者、転じて釈迦の漢名となる。調御は一切の衆生をなびかせたがえること。」

47 慈氏法王 至高の慈悲の持ち主で、仏法の王者である者。

44 句以下は全て釈迦如来の名号であると考えられるが、その

本体たる毘盧遮那仏をも指している。次の例は、『華嚴經』の「十地」に触れて「法王」をたたえており、その「法王」は毘盧遮那仏を指していると考えられる。△『敦煌願文集』願文 Pelliot 2226▽「大哉法王、名言所不測者也。」（大なる哉法王、名言せんとするも測らざる所の者なり。）

49 九族 高祖・曾祖・祖父・父・自己・子・孫・曾孫・玄孫の同姓直系の親属。その他にも諸説がある。

50 六親 父母兄弟妻子。家族。

51 沢遍昇「降」 仏の恩沢があまねくみちる。「沢遍昇」の下に、「降」一字が欠けているものと見て「沢遍昇降」とする。

「昇降」は、天界・浄土にまで昇り、六道・地獄にまで降ること。

52 慶兼存没 慶さいわいが生者と死者とにみちる。「存没」は、生存

しているものと死没したもの。51・52 句について、小野氏は

「沢遍昇慶、兼存没」のように区切り、「沢うろおいは昇慶のものに遍あまねく、存没を兼ね」と読む。また「昇慶」に注して「昇級慶

賀など俗界の成功者として祝福せられるもの。存没。存亡と同じ。疑うらく□兼存没の四字句で、一字欠け、もとは救済・

徳音のごとき意味の字があつたであろう」と言う。しかし「沢」と「慶」、「遍」と「兼」、「昇」と「存」が対応してい

ると見えるので、51句末に「降」を補うこととした。

53並使 そのうえゝならば。更にゝならば。「使」は、仮定の意を示す。

53解窮七覚 見解が七覚分を窮めたならば。「解」は、見解、

知解。《『敦煌変文集』維摩詰経講経文》「只縁智慧過人解。」

(只だ智慧の人の解に過ぐるに縁る。)^よ「七覚」は、七覚分。

仏教の修行の七種の中味。たとえば、智慧によって物事の真偽を判別する「折法覚分」など。《『涅槃経』光明遍照高貴徳

王菩薩品》「声聞・縁覚雖修七覚、猶不能乾。」(声聞・縁覚

は七覚を修すと雖も、猶お乾なる能わず。)小野氏は「解窮士」

とし、「窮士を解き」と読んでいる。またその「窮士」に注し

て「原文は窮士に似ている。窮士は貧しく困っている士人。

解は解脱せしめること。あるいは窮亡の誤りかとも思われ

る」とする。合田氏はこれを「窮亡」に作り、「並使解窮亡覚。

識洞三明」と区切っている。どちらも誤りかと思われる。原

本は、明らかに「士」「亡」よりは「七」に近く、54句の「三

明」と対応して「七覚」とするべきである。《『敦煌願文集』

僧」文Pelliot 2058: 3566》「是以無去無来、始証三明之径、

非色非相、方開七覚之門。」(是を以って 去ること無く来た

ること無くして、始めて三明の径を証し、色に非ず相に非ず

して、方に七覚の門を開く。)

54識洞三明 見識が三明をつらぬくならば。「識」は、見識。

「三明」は、仏や修行者が持つ三つの神通力。第一に、過去

世を見通す宿往智証明、第二に、未来の衆生の死生を見通す

死生智証明、第三に、真理によって煩惱を断滅した漏尽智証

明を言う。《『弘明集』卷十。大梁皇帝勅答臣下神滅論、領軍

司馬王僧恕答》「今皇明体照幽寂、識洞内外。」(今 皇明 体

は幽寂を照らし、識は内外を洞く。)

55弊帛 よごれ破れた布。迷妄を、仏の体をおおっていたば

ろ布にたとえたもの。このような比喻が意外に広くおこなわ

れていたことは、次の例からも推測できる。《『敦煌願文集』

十万千五百仏名明勝題記願文・大谷大学図書館蔵本》「塵羅

之弊、雲飛雨散。」(塵羅の弊は、雲と飛び雨と散る。)

56金体 仏の黄金の体。真理をたとえている。

57灰炭 燃えのこりの灰と燃える炭。迷妄・煩惱を炭の炎や

灰にたとえる。仏教では、悟りの境地を「涅槃」と呼ぶが、

そのサンسكريット原語nirvāṇaの意味は「煩惱の炎が消さ

れた状態」である。従って「灰炭斯尽」とは、煩惱の炎の結

果の灰もそれを生む炭も、全てが無くなって悟りの境地に入

ること。

58 樹想 樹木のようにのびひろがる想念。迷妄・煩惱ののびひろがるさまを樹木にたとえたもの。

59 葉悩 葉のようにのびひろがる煩惱。「悩」は、本文では「愍」に作る。「愍」は「悩」の異体字。小野氏注に「又業愍のこととも解せられる」と述べられている。「葉」を「業」の誤、または酷似した異体と見たのだろう。だが58句の「樹想」と対応するので、いまは文字を改めずに解する。

60 蓋纏 心中の智慧に蓋^{ふた}をし、それをからめ縛るもの。智慧をふさぐ煩惱を言う。《『敦煌願文集』願文Stein 4536》「帰依者、□□苦海、迴向者、唯離蓋纏。」（帰依する者は〔咸^みな〕苦海を〔出^いで〕、迴向する者は、唯だ蓋纏を離る。）

61 禅恵 冥想して身心を統一する禅定のめぐみ。禅観を修行した成果。

62 道如 究極の真実のすがた。道それ自体。「如」は、サンスクリット語tathataの訳語。原義は、「そのようであること。」

《補注》

毘盧遮那 四二二年に完成した旧訳六十卷本『華嚴經』では、Vairocanaを「盧舍那」と音訳している。同じ仏を「毘盧遮那」と音訳した新訳八十卷本『華嚴經』が生まれるのは、六

九九年のことである。この趙王の「平常貴勝唱礼文」が書かれたのは五七〇年前後と考えられる（五七三年には趙王の実兄である北周武帝の排仏令が出されており、この唱礼文はそのやや前に書かれていることが確実である）から、新訳『華嚴經』に先だつこと一三〇年ほどである。言うまでもなく趙王は新訳八十卷本『華嚴經』を知らなかった。

ではなぜ、「毘盧遮那」という新訳の仏名がここに記されているのか。考え得る一つの可能性は、趙王の原文は旧訳「盧舍那」だったが、聖武天皇が筆写したときに新訳「毘盧遮那」に誤写した、ということである。しかし、この説は成り立たない。なぜなら、対句の対応する位置に「漚和拘舍」という四文字の名詞が置かれているからである。「漚和拘舍」に対応するのは「毘盧遮那」の四文字であり、三文字の「盧舍那」では対句にならない。従って趙王は最初から、みずから、「毘盧遮那」と表記したことはまちがいない。

では趙王招は、なぜ、どこから「毘盧遮那」という仏名を知り得たのか。実は、新訳八十卷本『華嚴經』が出るよりも前に、「毘盧遮那」という仏名は登場している。管見の及んだ範囲で言えば、天台智顗（五三八―五九七）が、たびたび「毘盧遮那」の仏名を用いているのである。次の四書に、それが見える。（数

字は大正大藏經の番号)

1705『仁王護国般若經疏』五卷 智顗説・灌頂記(五八四年)

1716『妙法蓮華經玄義』二〇卷 智顗説(五九三年)

1718『妙法蓮華經文句』一〇卷 智顗説(五八七年)

1728『觀音義疏』二卷 智顗説・灌頂記(六世紀後半)

このうち『觀音義疏』については偽書との疑いも持たれているので、今は排除するが、のこりの三編に、「毘盧遮那」仏はたびたび登場している。たとえば『妙法蓮華經玄義』卷五上に「毘盧遮那法身、横周法界、豎極菩提」(毘盧遮那法身にして、横ざまには法界を周り、豎^{たて}ざまには菩提を極む)と出ている。興味深いことに、一七一六や一七一八には「毘盧遮那」と「盧舍那」の両方の名前があらわれる。あるいは、經典からの引用の場合には旧訳のまま「盧舍那」を、その解説や自己の意見を述べる場合は新しい「毘盧遮那」を用いたのだろうか。

ところで、智顗が「毘盧遮那」を用いた一番古い書物は―現在確認できた限りでは―一七〇五『仁王護国般若經疏』五卷で、成立は五八四年、つまり趙王の死後四年目である。ここまで近い時期の例が確認できる以上、趙王の生前にすでに「毘盧遮那」という仏号が用いられたと推測して良いだろう。ただ、天台智顗は南朝・陳の人である。趙王は言うまでもなく北

朝・北周の王族である。智顗の用例から判断して南朝・陳では「毘盧遮那」が相当広く用いられていたと認めるとしても、北朝・北周の王族がそれを知り得たのはなぜか。

一つの可能性として、五五四年、北朝・西魏が梁のみやこ江陵を襲い、十数万の人々が北に連れ去られた事件を思いうかべることができる。梁の知識人―その中の一人が趙王の文学の師ともいべき庾信だった―の多くが北に連れ去られたとき、「毘盧遮那」という呼称も一緒に南から北へと移動した、という可能性を考えることができよう。また彼らはその後も南北交流の橋わたしになったので、五五四年より後に彼らの仲介によって北地に「毘盧遮那」という呼称が伝播したとも考えられる。今は可能性の指摘のみに止め、別の機会に論じたい。

(あんどろ のぶひろ 本学教授)